

弾詞『天雨花』における女性と亡国の意識

輪田 直子*

The consciousness of Women and the ruined country in *Tian yu hua*

Naoko WADA*

*Department of Human Culture, Faculty of Human Studies,
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki, Japan*

はじめに

国が亡びるとき、人は何を考え、いかに身を処してきたのか。

小説『三国志演義』の冒頭に「そもそも天下の大勢は、分かれること久しければ必ず合し、合すること久しければ必ず分かれるもの（話説天下大勢、分久必合、合久必分）」とあるように、中国では国とは亡び、そしてまた興るものであるとの共通認識があると考えられるが、そこには往々にして民族間の衝突が介在するがゆえに、その悲劇性は一層強烈なものになったはずで、古来フィクションの格好の題材となってきた。

清・嘉慶道光期の詩人・陳文述は『西冷閨詠』巻十五において楊芳燦（号：蓉裳、1754—1816）の言として「南花北夢江西九種」と引用した上で、「南花」すなわち弾詞『天雨花』が、「北夢」＝『紅樓夢』、そして「江西九種」＝蔣士銓の劇とも併称される作品であると紹介した。このようにジャンルを超えて一定の評価がなされる弾詞『天雨花』は、スーパーヒーローとしての左維明と、その左維明をも凌ぐ存在感を示す娘・左儀貞の縦横無尽の活躍を中心に、国家の命運と家庭生活の悲喜劇をとともども存分に描ききった快作と言える。

その『天雨花』は亡国文学の側面も持つ。物語の最後、主人公の左家とその同志とも言うべき四家は、滅び行く明朝に殉じ襄陽を流れる襄江（漢江の別称）に船とともに沈みゆく。満州族による清建国に対して必然的に湧き上がったのであろう激烈な愛国感情を隠すことなく歌い上げたその調べは大いに人々の共感と呼んだことと思われるが、この劇的なクライマックスに女主人公・左儀

貞の活躍が急激に減少しているのである。

本論は亡国という一大事件を物語がどのように描き、人々の共感と呼んでいったのかについて、弾詞という女性の存在が大きな意味を持つジャンルとその時代背景を手がかりに解き明かすことを目的とする。

1. 『天雨花』 あらすじ

最初に本作の梗概を以下にまとめる¹。

明の万暦年間、湖北襄陽の北直隸総督の左彝とその妻・蘇氏には四十歳を過ぎても子がなかったため天帝に祈りを捧げたところ願いが叶い、世の腐敗に立ち向かう人として武曲星を受胎し、生まれたのが長子・維明（字・居垣）であった。維明は幼少より聡明で、長じると文武両道に優れた義人となった。次子・維政はその伯父・蘇佩の養子となる。左彝は万暦二十二年に北元トゥメト族との戦いで命を失った。

左維明は桓応徴の妹・清閨を娶った後、状元に及第し官は修撰になる。維明の親友であるいずれも名家の子息、王正芳、趙聖治、杜宏仁、そして義兄でもある桓応徴も同様に地位を得ていった。

維明は十九才で、都察院の左副都御史になった。この年桓氏は長子・永生を生み、明るる年娘・儀貞を生んだ。北元が再び国境を侵したので、維明は自ら出征を願い出て、父の仇を報じ、その功で維明は左都御史兼刑部尚書に昇進した。ついで、浙江巡撫となり、在任中しばしば懸案の裁判を解決し、冤罪をすすいでやり、民衆のために害を除いてやった。任期を終えると、辞職して帰郷し母に仕えた。のち、桓氏はまた二女・徳貞、

*石巻専修大学人間学部人間文化学科

婉貞を生んだ。

維明は妾を持つことを最も嫌った。その母に桂香という下女がおり、維明の第二夫人に納まろうと妄想を働かせた。左母は惑わされて維明に妾を迎えろと迫るが、維明が同意しないため、桂香は維明の酔いに乗じて、夫人桓氏を装って同衾する。しかし、維明は酔いの醒めた後、さらにこれを拒絶した。

五年後、左母は病でみまかる。服喪が終わり、維明はまた都へ行き官職につく。当時、鄭貴妃の兄・国泰と首相・方從哲は帝位を奪おうと謀るが、維明の忠義を恐れて、密かにこれを除こうとする。のちに鄭国泰父子は東宮を謀殺しようとするが、維明のために叶わず、国泰父子は職を解かれて平民となる。方從哲父子は維明を陥れようとするが、またもや維明にしてやられ罪を得る。鄭国泰父子はしばしば維明に害をなそうとするが、ついに果たせなかった。

時に維明の長子・永正は趙聖治の娘・舜娥を娶り、長女・儀貞は桓応徴の子・桓玉に嫁ぎ、次女・徳貞は王正芳の子・礼乾に嫁ぐ。杜宏仁の子・順卿は、いとこの黄静英と相思相愛になる。静英の父の愛妾は娘を嫌って、静英がこっそり順卿に宛てた手紙を見つけ、ふしだらだと中傷し、彼女を身投げさせようとするが、維明のおかげで助かる。のち維明は静英の父に自らを媒酌人とさせ、静英を順卿に嫁がせ、両者の婚姻は果たされる。その他の子供たちも皆功名を得てのち、前後して結婚する。

神宗が病没して、光宗が位を継ぐ。寵姫・李選侍は中宮になろうとして、方從哲、鄭国泰と共にはかりごとをめぐらす。方、鄭の二人は既にこの時復権しており、維明の二度目の北征の機に乗じて、光宗に紅丸（モルヒネに硫酸を加えたもの）を飲ませ毒死させ、さらに太子の称号を廃止する。鄭国泰は自ら帝位に登り、また維明の娘・儀貞を后とする。儀貞は計を用いて国泰を殺す。国泰の子・有権もまた機に乗じて位を奪い、儀貞を冷宮に軟禁する。維明はこれを聞き、急ぎ都に戻り、計略で城を落とし、有権らを死罪にし、太子を擁立し、熹宗とした。維明は忠烈侯に封じられ、首相に任ぜられた。

その後、太監・魏忠賢が権力を得、各地では生

祠を建てこれに阿諛追従したので、維明は大いに反対した。魏忠賢は維明を除こうと、時には刺客を送り、時には妖術を使ったが、叶わない。熹宗の乳母・客氏は忠賢と私通していたが、三人の娘・梅姣、桃姣、荷姣のために婿を選びたいと思っていた。そこで、庭を開け放しにして男の遊びに来るのを招いていたところ、永正、桓玉、順卿の三人は誤って入り込んでしまい、無理矢理留まらされてしまった。しかし、三人は従わなかったため、その身が危うくなる。維明はこれを聞き、家の者を引き連れて救出した。のち維明が官についたときにも、またもや忠賢は美人計でその婿を陥れようとしたが、維明に見破られ、かえって自分の甥たちを亡くしてしまった。双方の敵対関係がいよいよ悪化したため、永正らは長く留まるべきではないと、皆を引き連れて帰郷した。

崇禎十五年、李自成が都を制圧し、思宗は煤山で縊り死にし、明は滅んだ。そこで、維明は桓、王、趙、杜四家と相談し、国に殉ずることにする。すべての官についたことのある男子と、五品以上の位を授かった婦女はみな襄江に浮かんだ舟を沈め節に殉じた。

2. 左維明と左儀貞——ヒーローを凌駕するヒロイン

このように本作は左維明という文武両道・忠勇無双のスーパーヒーローが、滅び行く明朝の掉尾をかざる星のように（実際、彼は天界の武曲星の生まれ変わりとされている）活躍する物語である。さらに公人としてほぼ完全無欠の彼が、家庭においても一夫一妻多妾制に異を唱えるという、（あくまでも正夫人として婚姻する機会のある）女性にとっては理想的な好男子ぶりを発揮するというおまけまでついている。読者の多くを女性が占める弾詞作品にあってもこのような価値観を表明する男性は滅多におらず、物語が解決した後に関わりのあった女性がまとめて主人公の妻妾に迎えられることで大団円となるのがお決まりのパターンであることを思えば、『天雨花』の作者が描くこの男性主人公像はやはり異彩を放っていると言える。

しかし、この一見女性の人権にまで配慮が行き届いたようにも映る左維明が、実際には家族の女

性たちに対して強権を發動し抑圧するなど、決して完璧なヒーローとしては描かれていないことが先行研究でも指摘されている²。

左維明と桓清閨との結婚にまつわるエピソードはその代表的な例と言える。二人が出会う前、清閨は母親と留春園を訪れた際、麗春堂にうっかり自筆で詩と名前を書きつけた扇を落としてしまうが、それを見つけた維明がその詩才にあこがれ、麗しい姿も目にするに成功し、何としても妻にしたいと願う。維明はこっそり拾った扇のことは明かさずまま周囲を説得し、見事清閨と結婚することに成功する。ところが結婚後維明は、女性としての礼法を守り閨房にいるべき清閨が人目に触れた挙げ句、名前を知られ姿さえ盗み見されたことを——無論それは維明自身によってだったのだが——問題視し、妻を教育すべく責め立てる。

「結納の後、私があなたとの婚姻のことを友人親戚に話すと、なんとあなたの名前を知らぬ者は誰一人としていない。みなあなたが才色兼備で詩も画もよくする、襄陽一の才能と美貌の持ち主だと言うのだ。私は驚き怪しんだ。あなたは閨門を出ることはないお嬢様のはずなのに、なぜ外の人がこんな評判を立てるのだろうか。そこで聞いてみると、あなたは留春園に遊びに行った時に、みなにじっくり姿を見られていたために、その美貌が知られていたのだ。そして、ある浮薄の輩が麗春堂であなたの扇を拾ったのだ。そこに牡丹の花が描かれていて、裏には牡丹の詩が書きつけてあり、その上あなたの署名もあった、そのためあなたの才も知れ渡ったのだ。その浮薄の輩は扇を宝にして、出かけるときは必ず持ち歩き、逢う人ごとにそれを自慢しているのだ。(納采之後、我在外辺朋友親戚說起來，竟無有一人不知桓清閨大名，說你才貌兼全，能詩能画，是襄陽城內一箇仕女班頭，蛾眉魁首。我聽了這些言語，也是驚奇。想你乃不出閨門的小姐，如何被人在外如此伝揚？因而留心打聽，方知你因在留春園頑耍，被那些游人熟睹，故知你外貌無雙。若說內才，乃是一箇輕浮子弟，因在園中麗春堂，拾了你一把扇子，上辺一面画的是牡丹，一辺是牡丹詩一首，又有你落款書名，

所以曉得你能詩能画。那輕薄子將詩扇視為異宝，但出来必持此扇，逢人誇説。）」（第3回）³

清閨はすでに自分が扇をなくしてしまったことに気づき心配していたところであったため、新婚の夫に知られた上、あらぬ噂が広まったとあっては不安でならない。実家から祝いの席に招かれたのもあきらめ、何とか扇を取り返してほしいと維明に頼む。このようなやりとりの後、維明は一人になると満足げな笑みを浮かべる。

「維明は別れて書齋へ来ると、
 維明作別到書廳，
 お嬢様を思いこっそり笑う。
 心中暗笑桓小姐，
 私の芝居は迫真もの、
 把我一派虚言認作真，
 たっぷり後悔したはずだ。
 十分懊悔従前事，
 十分反省したときに、
 直待她身悔万分，
 例の白檀扇を返してやって、
 那時還彼檀香扇，
 安心させてやろうじゃないか。
 解釈疑团安了心。」（第3回）

維明の姿勢は、当時の男性優位社会にあつてさほど物珍しい態度ではなかったかもしれない。しかし、外にあつてはあくまで公明正大な維明が、一種のからかいとは言え執拗に妻を責め立てる姿に、後にからかいの全貌が明らかになるまでの経緯の妙を期待させる効果はあるにせよ、維明自身のキャラクターに違和感を覚え、敵愾心を感じる読者がいても不思議はない。

このような左維明の人物像は、その長女である左儀貞と比較することで一層明確になる。維明の弟・致徳は、大人物である兄には遠く及ばぬ凡人ぶりであったが、家庭ではやはり兄同様、厳しく妻子を教育していた。その三つ子の娘の一人、秀貞は侍女の紅雲と容貌が似ていたが、この紅雲が秀貞になりすましその従兄弟と逢い引きした挙げ句身ごもってしまう。これが誤解を呼び、父の致徳は（侍女ではなく）娘がふしだらをしでかした

と思ひ込み、烈火のごとく怒り狂い散々に秀貞をたたきのめす。母の周氏は何とか娘を助けようと実家に隠そうとするが、その途次秀貞は亡くなってしまふ。付き添っていた紅雲は事の露見を恐れ、またも秀貞になりすましたものの、左家の敵である鄭国泰に献上されてしまふ。その後、鄭国泰は皇位を篡奪するも、何と“偽”秀貞同様さらわれてきた左儀貞の手にかかって死ぬ。儀貞は助け出されるが、“偽”秀貞は逃げられず、鄭一族の者として処刑を待つ身となる。この時、儀貞は従妹の救出を父や叔父に懇願するが、二人は秀貞が家門に泥を塗ったと見捨てようとする。儀貞は命がけで二人に抵抗するが叶わない。しかし、儀貞の真心を尽くした対応に“偽”秀貞＝紅雲は深く感じ入り、最後に刑場で己の罪を全て告白し、真の秀貞の汚名をそそいだ上で刑に処される。哀れではあるが、自業自得の責めは逃れられない紅雲の死である。

結果的に秀貞の命を奪ったのは父・致徳であるが、方蘭が「左維明もこの事件にあって、偽善者の責めをまぬがれない。事件の真相が見えなかったにしても、家門の恥をそそぐために「秀貞」（筆者注：実は紅雲）を殺そうと考えるのは、やはり「人情」と「天理」にもとる」⁴とするように、忠義忠節の人ではあるものの、父権社会の秩序を絶対とする当時の儒家規範の権化として描き出されたその姿は読者が共感できるヒーロー像とはどうい言いがたい。鮑震培は『天雨花』における士大夫の女性に対する態度の矛盾について「婦女が教育を受けその才能を伸ばすことを奨励する一方、それを恐れ、懸念し焦りもする。何とかして家庭内の婦道を守り、婦女の発展の可能性を最小の範囲内に制限しようとする」と言及する⁵が、もちろんそのような価値観の揺らぎを呈する代表人物が左維明なのである。

一方、左儀貞とは言えばこの場面での行動に顕著なように、物語のいかなる局面においても自身が正義と信ずる行動——単に儒教道徳に照らしての正しさにとどまらず、いわば人道主義を頑なに貫く姿勢をとり続け、その尊敬してやまぬ父・維明に対してでさえそれは変わることがない。彼女は『天雨花』に登場する他の数多くの女性とは全く異なる個性を賦与され、「彼女には中国の女性

が持つ聡明勇敢、自己犠牲、堅忍不拔、暴力に屈しないなどの高い品位があり、これこそが作者が尊ぶ「徳行」なのである——それは伝統的な「三従四徳」などでは決してなく、独立した一個の人格を持つ新型の「女徳」なのである」⁶。

その圧倒的な存在感は、上に挙げた秀貞救出を父や叔父に訴える場面でも発揮される。

「維明は儀貞を叱りつけ、
左公便喝女親生、
血相変えて怒り心頭
勃然変色重重怒、
怒りに震えて机を叩き
戒方拍桌震人心。
儀貞を激しく罵った、
指定儀貞来罵罵：
「親に逆らう無知な畜生め、
問你無知逆畜生！
おまえの胆は身の中に包まれている？
你今還是身包胆、
それとも太い胆で身を包んでいる？」
你今還是胆包身？
儀貞はそれを聞くや、
小姐聽得如此問、
やむなく父に答えます
只得回言答父親：
「もちろん胆は身の中です、
為人自是身包胆、
まさか胆で身を包むだなんて！」
誰人生得胆包身？
維明は儀貞をにらみつけ、
左公照她只一下：
「畜生！よくもぬけぬげと、
畜生猶自巧言論、
ええい、もう知ったことか、
罷了、我也不必来問你、
すぐに秀貞打ち殺してやる！」
只立時打死有何論？
そしてにわか立ち上がる。
言罷一声離坐起：
美人は驚き氣も失わんばかり
玉人唬得失三魂、
頭を垂れてひざまずき

低頭忙跪塵地。
 顔を覆って涙にくれる
 掩面悲啼哭失声：
 「ああ、もう命令を出されたの？
 呵呀，爹爹莫非為了論單事，
 だから私をお怒りに？
 因而大怒責兇身。
 でも私は 秀貞死ぬのが堪えられない、
 念兇不忍三妹死，
 本当に命は助からないの？
 実実生于無奈心，
 命令すでに下しても、
 論單已是伝了去，
 すぐに刑にはならぬはず。
 司獄遵行不挙刑。
 こんな勝手は許せない、
 出爾反爾難為她，
 父上、叔父上、みな高官
 父叔都皆位大臣。
 どうか秀貞を憐れんで、
 乞憐三妹残生命，
 代わりに私を死罪にして！」
 孩兒就死罪該応。

維明は秘かに考える、「秀貞を殺したと言ったら、あやつ自分の命はいらぬから、秀貞を救ってほしいと言ってきた。女子がかくも義に厚いとは！自分を許してほしいと言ったなら許すつもりが、何と死を願うとは。鞭打ちでもせぬ限り、どうすることもできぬ。」（左公暗想：説了打殺她，這妮子不為自己乞命，還要替秀貞求生，不想一女子這般義重！她若哀乞討饒，我亦可乘機息事，誰知倒説願甘就死，却叫我無法可行，只得要責她幾下了。）（第16回）

維明は娘の頑固さに、義侠心に恐れをなすほどであり、その弁舌の巧みさには「こやつ舌鋒恐るべし、私には答えることができぬ（這妮子舌鋒可畏，回答不來）」（第16回）とお手上げといった体である。儀貞が父・維明を明らかに凌駕している場面であり、また維明もそれに薄々気づいている。

弾詞には女性が活躍する作品は数多いが、なかでも男装の女性・孟麗君の名が人口にも膾炙した

『再生縁』は特に有名である⁷。主人公の孟麗君は仇との望まぬ結婚を避けるため、女性の身分を隠した後、男性として科挙に主席合格し状元として出世する。孟麗君の活躍は男性に仮託してはじめて可能なものである。しかし、正体が露見した後、物語はそこで中断される——孟麗君が眠り込んだところ、纏足の足を見られてしまい万事休すという場面だが、作者は孟麗君が眠った場面で筆を置き、その続きを書かなかった。続編は別人によって再開されたものの、その結末は、孟麗君がかねて恋仲であった皇甫少華とついに結ばれ、また仇の妹である劉燕玉も昔日少華を救った際の約束どおり第二夫人に収まり団円を迎えるという弾詞の常套に堕し、孟麗君の輝きはすっかり失われたと言っても過言ではない。

ちなみに『再生縁』には、孟麗君の妹分である蘇映雪が麗君の身代わりの花嫁に扮し、新婚の寝室で仇である劉奎璧を刺殺しようとする場面が描かれる。奎璧は最終的に罪に問われ処刑されるものの、この時は生き延びる。それでも映雪の働きはなかなかに見事である。そして、このエピソードは先に紹介した『天雨花』で左儀貞が鄭国泰を刺殺したものと非常によく似ている。違う点と言えば、『再生縁』では活躍する主人公の孟麗君ではなく脇役の蘇映雪が手を下すのに対し、『天雨花』では左儀貞自ら暗殺を実行しているということである。

鄭国泰の手の者にさらわれあわや皇后にされそうになった儀貞は、国泰にうまく酒を勧め、死んだように眠ってしまった彼を眼下に殺害を決意する。

「胸の内口にする、左儀貞よ——（心中暗想道：左儀貞啊）

おまえは普段は身で胆を隠しているが、

你平日只用身包胆，

今宵は大胆にならなければ。

今宵須要胆包身。

今こそ仇を討ち果たし、

報仇雪恨全在此，

忠節の誓いを果たすとき。

完節全名只此行。

ゆめゆめこの手をゆるめないで、

千万不可来手軟、
奸臣 一刀兩断に！

須要一刀兩段老奸臣！

儀貞は奸賊を見つめると、急に怒りが湧いてきて、すぐさま殺意が芽生えてきた。自然に力がみなぎり、右手で剣を握ると、左手で鄭国泰を指さし、「この奸賊め、身の程も知らず帝を弑し奉り国を篡奪し、その上この女英雄の私をもてあそぶとは！奸賊、今こそ私の剣を受けてみよ！（儀貞便定晴看了奸賊，勃然大怒，立起殺心：不覚渾身用力，右手握劍，左手指定鄭国道：你這奸賊，胆敢弑君篡國，又敢戲我女中英雄。奸賊，你此刻且吃我一劍。）」（第15回）

『再生縁』では主人公以外の女性陣もそれぞれ自立した活躍を見せていることを思えば、『天雨花』におけるただひとりのヒロイン・左儀貞の圧倒的な完全無欠ぶりは殊更目を引くのである。その儀貞を引き立てているのは、一つには先に触れた従妹の左秀貞をはじめとする多くの「無学無才」の女性たち、すなわち当時にあっては当然そうあるべきとされる家庭の中に生きる人々である。例えば、その母・桓清閨は結婚する際のいきさつで上述のとおり夫の左維明の掌の上でもてあそばれたような格好であったが、その後も本来は才色兼備の女性であるはずの清閨が、家訓の徹底に余念のない夫の高い要求のために心を傷つけられる日々が続く。それは当時の典型的な女性像である。ところが長女の左儀貞は子どもの頃より女性の範疇に収まらない才女で、父・維明もそれを認め、長男・永正ともども自分の手で男児なみの教育を施すから、妻の清閨には母として儀貞に針仕事などのみ教えるよう指示する。すると清閨は「永正、儀貞の二人はあなたにそっくり、ずる賢く腹黒のものたち。今日から父子三人、ともに悪巧みして一緒にやっていけばいいのです！（永正、儀貞両箇都像你，是箇狡惡奸詐之人。今日說過，就等你父子三人去同惡相濟便了。）」（第7回）とふて腐れてみせる。旧態依然たる母の姿は儀貞の先進性をいやが上にも際立たせてしまう。

そしてもう一人、儀貞を引き立てているのが他ならぬ父・維明である。自ら見込み教育を施してきた長女は、父の想像を遙かに超えた精神性の持

ち主として成長する姿が描かれるのだが、それとは対照的に物語の主人公でありヒーローたるべき左維明が、娘と対峙する時には策を弄し、強引にこれを服従させようとする。維明が表の世界で活躍すればするほど、その家庭内での振る舞いは読者に違和感を抱かせ、結果的に儀貞を確固たるヒロインとして造形することに成功している。

3. 左儀貞の“亡国”——物語の結末

このように『天雨花』における左儀貞の人物像は、封建時代を生きた女性としては考え得る最大の活躍を賦与されていると言っていい。ところが、本作を特徴付ける結末部分のエピソードである殉国に関しては、その存在感が発揮されているとは言いがたい。この節では殉国の観点から左儀貞を論じてみたい。

まず、最終第30回の主な流れは以下の通りである。

崇禎元年、李自成の反乱軍がいよいよ迫る中、左維明は兵を率いて河南府へやって来た。元帥の左良玉は河南に駐在していたが、李自成に及び腰で用をなさない。そこで左維明は千の兵を借り受け、李自成軍の駐屯する紫金山に向けて出撃し、一ヶ月半後、紫金山までやって来た。数に劣るため火計を用いて敵を破った左維明に、左良玉は感服する。

月日は流れ、崇禎十年の春、左家では致徳の長男である永孝が十六歳、維明の長孫である裕宗が十四歳になり、伯父・甥の二人ともに生員になり、維明の長男・永正には三男一女が生まれ、明朝の気は尽きようとしていたが、左家の繁栄は続いていた。周囲は国の行く末を案じていたが、左維明は亡国の際には国に殉じるだけと泰然としている。

左家では子弟がみな武芸に秀でていたが、永孝だけは詩文に専心した。ある日、永孝は真珠のついた金のかんざしを手に入れるが、それは実は永孝の三姉＝秀貞の物で、永孝は姉の非業の死の顛末を知る。母・周氏は永孝が秀貞の生まれ変わりだと信じるが、永孝は取り合わない。翌日墓参りに訪れた永孝は秀貞の墓前で思わず泣き崩れてしまう。そして、自身が秀貞の生まれ変わりである

と感じる。

時に張献忠の軍が襄陽・荊州へ攻め込んで来たため、左維明が迎え撃つものの軍勢は少なく、不利な戦いとなり、やむを得ず城内の守りを固める。張献忠は宜城を破り、兵に守備を固めさせ、ついで襄陽を狙う。左維明は襄陽で守っていたが、ある日夢の中で男（実は城隍神）が維明に、「張献忠が台頭してきたのは天意である、あなたは手を出してはいけない。遠からず彼は自らその命を捨てることになる」と伝え終わると消える。目が覚めると、献忠が兵を率いてやって来たが、左維明はこれを破り生け捕り都に護送する。しかしその途中で軍勢に襲われ、献忠は自ら川に身を投げた。以後、領民は維明を神のように敬った。

永孝は前世の事情を知ってから、ますます母親に孝養を尽くすようになった。母も永孝を秀貞のように見るようになった。

崇禎十七年三月、李自成がついに都に入り、帝は煤山で国に殉じた。左家でも戦死者が出る。ここに及び桓、王、趙、杜、左の五家では出仕した男子と、五品以上の爵位に封じられた女はそろって舟で襄江（漢江）に沈み節に殉じることを決めた。五月十五日、みなは最後の語らいの後、国に殉じた。

すると九天の宮殿が開かれ、四大天師が玉旨を賜い、左維明をもとの武曲星にし、付き従う者もそれぞれ星官とした。左維明は天界で死後の裁きを行い、儀貞がそれを助ける。その結果、永孝は下界へ下りることになった。下界では既に幾年かの春が過ぎていた。永孝は襄陽に戻り、生き長らえていた家人を捜し出し、事情を説明した。家人も永孝に、船が沈んだときに彩雲と笙鶴が天から下りてきて、五家が昇天する様を見た漁夫がいると話した。その後、永孝は家を守り、子孫に学問や家訓を伝えた。子孫や土地の老人もこの話を伝えていった。

以上の流れからもわかるとおり、この最終回で左儀貞はほとんど登場しない。殉死以前の場面では、秀貞の生まれ変わりであったとされる永孝が真珠のかんざしを手に入れようとしたが、所持金が足りなかったため、儀貞に借りに行くという場面が出てくる。しかしこの話の中心は当然のこと

ながら永孝であり、秀貞である。むしろ、この場面では儀貞が出現するのが不思議なほどその登場には必然性もなければ、その後の展開にも全くつながっていかない。さすればやはり人気の主人公を久しぶりに登場させたというほどの意味合いであったのだろうか。

次に肝心の殉死の場面についてはどうであろうか。まず、五家で殉死を決めた後、左家の三女・婉貞については夫がまだ鴻恩を受けずに亡くなったため、殉死は求めずという決定がなされる。ところが、婉貞はこれに異を唱え、夫を追悼する長大な祭文をしたため哀切極まりない調子で歌い上げるのである。

左婉貞は、哀悼の詞を述べ、悲痛な思いを秘める

左婉貞、瀝哀詞、心中惨痛、
亡き君は、国難に殉じ、仁義をなす
念夫君、殉国難、取義成仁。
我が夫は、龍のひげなびかせ、星をわたり山を
震わす
我夫子、挽龍髯、星寒岳震、
老いを捨て、弱きを捨て、孤独のつらさよ…
棄衰遲、遺弱小、辛苦伶仃、…

（第30回）

婉貞の心意気を感じた父・維明は彼女の殉死を認める。この場面、急にヒロインが婉貞に変更したかのような扱いとなっているが、本来であれば主人公の儀貞が五家の祭文を読んでも不思議はない場面である。

決行当日、儀貞は次のように感慨を漏らす。「昔、符堅⁸が襄陽を攻めた時、朱序の母は下女を率いて築城し、符堅を退却させました。国が左良玉軍ではなく、父上を守りにつかせなかったのが恨めしゅうございます。（昔符堅来攻襄陽、朱序之母、率婢築城、符堅退走。恨国家不以左良玉麾下、授我爹爹以備戰守。）」しかし、父から帝が亡くなったのだから潔く殉じるべしと諭され儀貞は納得する。

こうして五家の者たちは襄江へと沈んでいく。すると、急に空からめでたい音楽が聞こえてきて、武曲星の維明をはじめそれぞれが星へと転生

する。維明は各自の働きを評価することになり、儀貞はその裁定結果を書き留める手伝いをするようになる。そうして、それが儀貞に与えられた作品中での最後の役割となるのである。

このようにして見てくると、『天雨花』において左維明を頂点とする主要な五家の者は皆、「明朝の滅亡＝全ての終わり」という極めて潔い価値観を共有しており、そこについて逡巡する姿はほとんど見られない。それは国に対して一点の曇りもない忠節を尽くした彼らにとってきわめて自然な発想であり、左維明に至っては、滅び行く自分たちを称して「私もおまえも成功者だ。襄江の流れに葬られ、真の美しい土となるのだ。(你我成功者、去葬于江流、真為干净之土。)」(第30回)と儀貞に語る。そこには亡国についての苦悩や悔恨、郷愁といったものは感じることができない。作品全編を通して、公私いずれの場面でも儒教的価値観を明快な態度で体現してきた左維明としては、この姿勢は矛盾のないものと捉えてもいいであろう。

ただ、左儀貞については事情が多少異なるのではないか。前章で見たとおり、彼女は国に対しては忠節を示し、鄭国泰という奸賊を打倒するために力を尽くすが、その過程で鄭国泰から徹底的に貞節を守るために、自らのスカートの裾を縫い閉じるという一途さを発揮する。それは言うまでもなく当時の儒家的価値観に基づく行動ではあるものの、一方ある意味では彼女の型破りで生き生きとした個性の光る描写となっている。先にはこのような行動を人道主義という言葉で評したが、この左儀貞に見られる情熱のほとばしりこそが『天雨花』という作品に高い評価を与え続けた第一の要因とすることに異論はないだろう。さればこそ、それまでの彼女の行動様式からすればこの結末の殉死の場面において儀貞が示した態度、亡国に対する反応には違和感を覚えざるをえないのである。

4. 清初と“亡国”

このことについて考える際、他の弾詞作品の結末が想起される。弾詞の結末は先にも述べたとおり男女の主人公が結ばれ、男性は栄達も果たし、その上、多くの作品では男性はさらにあと1~2

人の夫人も手に入れるという大団円が既定路線となっているのだが、その描き方は伝奇の結末部分にも似て、たっぷり紙幅を取って歌い上げることが多い。しかし、例えば『三国志玉璽伝』という作品について言えば、その制作年代が巻によってかなり差があり、そのような影響のせい、特に結末部分はそれまでの語りとは打って変わって出来事を詰めこみ、大急ぎで物語を収束させようとする意図が見られる⁹。しかし、それでもこの作品は部分的ではあるにせよ、人物像の設定が最後まで細やかになされている。その特徴的な一人の人物が呉の孫権の妹として登場する孫万金という女性である。万金は政略結婚で結ばれた劉備と深い愛情関係で結ばれたものの、これもまた政略のために母国への帰国を余儀なくされ劉備と再び会うことは生涯叶わなかった。別れて後の長い年月を、万金は深い苦悩を抱え生きていく。その万金の苦悩は実は、弾詞作品においてはあまり見られない描写なのである。そのことは『天雨花』の左儀貞の最後の姿と比較した際に明確になる。

なお、『天雨花』において五家のものはみな星となって空へ帰って行ったが、永孝だけは再び地上に戻された。そもそも秀貞が生まれ変わった姿という設定ではあったための特別な措置にも見えるが、つまり永孝はこの作品で活躍した人物の中で、唯一、亡国後の世、つまり清朝の時代を生きたことになる。しかし、新たな時代に生きる“遺民”の感情が彼から語られることはない。いよいよ亡くなるという際には「夫婦は一つの墓に埋め、左秀貞も合葬を、言い残したるその言葉、縁者は讃う その物語、多くの父老も語り伝う(遺言夫婦俱同穴、又合葬前身左秀貞、戚党並皆称故事、再多父老播伝聞。)」とのみ言い残す。

さて『天雨花』は、その制作年代は清初とされる。現存するテキストとしては嘉慶九年(1804)遺音齋刊本が最も古いと考えられているが¹⁰、その論拠の一つとして作者・陶貞懐による順治八(1651)年の序が付されていることが挙げられる。ただ現時点では制作年代を順治年間と特定できるだけの根拠はそろっていない。しかし、その内容としてここまで述べてきたとおり「亡国」を正面から扱った過激な内容を含む本作が、国家体制が安定し、書物の検閲・発禁といった文字禍の徹底

される康熙期以降の作品であるとするには無理があり、清代初期のいまだ擾乱の気運おさまらぬ中での制作であったと考えられる。つまり、この作品の「亡国」の描き方——正面から扱ってはいるものの、その描写が必ずしも十全であるとは言いきれない状況はこのような時代背景も影響していると言えるだろう。

国家に対する不穏な動きにはとりわけ敏感であったであろう康熙期に発表された孔尚任の伝奇『桃花扇』が同じく明の亡国を扱いながら、『天雨花』とは違い、三日で上演禁止となったという有名な逸話がある。もちろんそれだけの人気背景があったからではあろうが、このような対応には制作年代も一つの要因であったことは確かであろう。また、その『桃花扇』の結末については、拙稿「『桃花扇』における枠」¹¹において少しく検討しているが、この作品の時間構造には、語り手が作り出す一種の枠とも言える存在が物語の構造を規定しており、特にそれが顕著なのが最後の「続四十齣 余韻」の後日譚としての語りであることを論じている。ただ、ここで確認したいのは「第四十齣 入道」における登場人物の身の処し方である。明朝が滅んで後、主人公の侯方域と李香君は苦難の末に再会を果たすが、そこで僧侶から国の危機に恋愛とは何事かと一括され、悟りを開いた二人は別れを選択するという内容である。この別れをもって王国維は「他律的な解脱」だとして批判する¹²が、亡国についての一つの新しいアプローチであることは認められるであろうし、その苦悩を描かなかった弾詞『天雨花』よりは一步進んだ亡国文学であることは間違いないであろう。

おわりに——“女性作家”陶貞懐

最後に『天雨花』をめぐるもう一つの論点として、作者・陶貞懐について触れて補足したい。

中国古典文学の歴史における女性の存在感のなさは誰もが認めるところであるが、その中において弾詞は例外的に女性が重要な位置を占めるジャンルである。古くは鄭振鐸が『中国俗文学史』にて1章を割いて弾詞を詳述した際に、「弾詞の一部分は女性文学となった——女性のために書かれ、また女性の手によって生み出されるものに。」¹³と述べ、近年では1840年から1919年までの女

性の手になる文学作品の選集である『中国近代女性文学大系』(全8巻12冊)¹⁴も弾詞を1冊として取り上げるなど、中国女性文学史上における弾詞の重要性が確認できる。そして、本作『天雨花』もまた、女性作家の作品として数えられる一作である。

ただ、陶貞懐という女性自身についての事績が本人の手になる「原序」以外にはほとんど発見されていないため、女性であるかどうか現時点では確定されてはいない。またかつては陶貞懐という名の「陶貞」が弾詞の前身と考えられる「陶真」と同音であるため、仮託であろうとしてその実在にも疑いがもたれていた。ただし、この名が本名ではなかったとしても女性の手になる作品であろうことは現在ではほぼ一致した見解となっている¹⁵。本論で確認してきた女性にとってある程度は理想的であると認められるヒーロー・左維明を配置した上で、しかしそのヒーローによってもたらされてしまう閨房で発生する数々の事件や不協和音に対して、左儀貞というスーパーヒロインがひるまず立ち向かう姿。『天雨花』の独自性は、中国の封建時代に描かれた作品として、後続の『再生縁』『筆生花』といった弾詞作品のみならず女性文学全般にも少なからざる影響を与えたのである。この点については、稿を改めて論じることとしたい。

(注)

¹ 本概要の内容については、譚正璧・譚尋『弾詞叙録』(上海古籍出版社、1981年) p.106「天雨花」を適宜参照している。

² 方蘭『エロスと貞節の靴 弾詞小説の世界』(勉正出版、2003年) p.44～、鮑震培『清代女作家弾詞研究』(南開大学出版社、2008年) p.166、文迎霞「論『天雨花』中の左氏父女—兼論作者の女性身分与女性意識」(『江西科技師範大学学报』2024年2月、No.1)など。

³ 本論では主に中洲古籍出版社本(全30回。趙景深主編、李平編校、1984年)を底本として用い、東京外国語大学所蔵本(嘉慶癸酉刊)、温州大学所蔵本(光緒甲寅刊、三余堂)を適宜参照した。

⁴ 方蘭2003年、p.93～。

⁵ 鮑震培2008年、p.186。

⁶ 同上、p.187。

弾詞『天雨花』における女性と亡国の意識

⁷ 陳瑞生著。盛志梅『清代弾詞研究』（齊魯書社、2008年）付録「弾詞知見総録」p.455～によれば各種版本が存在するが、年代の知れる比較的古いものとしては道光元年（1821）香葉閣主人序、道光年間宝寧堂刊本（全20冊）がある。

⁸ 五胡十六国の前秦の第三代君主。338年～385年。

⁹ 拙稿「『三国志玉璽伝』成書年代から考える唱詞のディスコース」（『石巻専修大学研究紀要』第29号、2018年）。

¹⁰ 盛志梅 2008年、p.406。

¹¹ 『文化』第64巻1・2号、2000年。

¹² 王国維『静庵文集』「紅樓夢評論」第3章。

¹³ 初版は1938年商務印書館より刊行。本稿では1998年の重印本による。翻訳は筆者による（高津孝・李光貞監訳、2023年、東方書店、第12章）。

¹⁴ 郭延礼・郭浩帆総主編、齊魯書社、2021年。「文学評論巻・総序」p.6には「弾詞如果從它的創作主体和接受主体来考察,可以說是最正宗的女性文学了。」として、その女性文学における王道としての立場を認めている。

¹⁵ 方蘭 2003年、鮑震培 2008年なども女性作家作品として『天雨花』を扱っている。